

二〇二〇年七月三日

高鳴るは奈落の瀬音万緑裡
すれすれに舟傾かせ箱眼鏡
コロナ禍に続く自粛や梅雨寒し
蜘蛛の囀のシャンデリアめく雨後の晴

はく子

こすもす

ぽんこ

智恵子

二〇二〇年七月二日

魚臭き釣り銭もらふ土用かな
形代をのみて大波しざりけり
山寺の庭ひろびろと沙羅双樹

ひのと

素 秀

もところ

二〇二〇年七月一日

梅雨雲の切れて西空茜さす
句座涼しアガパンサスを高く活け
放課後の学び舎包む大夕焼
産土神の重き鈴の緒梅雨深し

みきお

菜々

満 天

うつぎ

二〇二〇年六月三〇日

朱の橋の右に左に蓮浄土
潮の香に覚むる古里明易し
手花火の残り香さらふ夜風かな

たか子

うつぎ

ひのと

二〇二〇年六月二九日

海坂のいまし展けて六月尽
水すまし己が影連れハイジャンプ
跳ね橋の跳ねて夏空展けけり
太鼓橋貫きくぐるつばくらめ

素 秀

ぽんこ

ひのと

こすもす

二〇二〇年六月二八日

梅雨晴れ間あれもこれもと切り戻し
終ひ湯に手足伸ばすや遠河鹿

明日香

ひのと

二〇二〇年六月二七日

端山いま茜に染まり夕涼し
撃ち下ろす面の一声堂涼し
鉄打てば青嶺嶺を返したる

やよい

ひのと

素 秀

毎日句会みのる選・二〇二〇年七月五日